

秘部から恥ずかしい液を垂らし、巨大パイプを膣に呑みこむ自分のはしたない有り様を思うと、前に史彦が耳打ちした言葉が耳に浮かんだ。

——奴隷調教……。

これはまさに調教だった。苦痛と快感と羞恥を使って、しのぶの反撥はんぱつを削そぎ、心と肉体を思うままに操る奴隷調教。

こんなことをつづけられると、サーカスで調教師の鞭に従って芸をするライオンのように、史彦の思い通りの奴隷ができあがることだろう。

やがて、ウサギの耳はクリップのように秘芽を挟み、三本目の枝はお尻の穴を浅く穿うがった。

「いい子だ。いい子だ。よしよし」

苦痛はそれほどなかったが、パイプのあまりの巨大さのせいで、圧迫感と膨張感があるものすごい。中腰になったまま、座することも姿勢を直すこともできなくなった。

しのぶができることは、両手のひらで下腹を押さえ、中途半端に腰を落としたへっぴり腰の姿勢で、振動が来る瞬間を今か今かと震えながら待っているだけだ。メンソールが与える冷たくて熱い感触もたまらない。

しのぶが巨大パイプとメンソールの刺激に戸惑い、身動きもできないでいる間に、

史彦が縄を持ちだした。

「えっ? えっ?」

おろおろしているうちに、しのぶはまるで小荷物のように縄をかけられてしまった。ウエストで二重に縄を巻き、お臍へそのあたりから股間に向かって縄をくぐらせ、お尻の谷間を通して尾骨の上でとめてしまう。

「くうっ」

しのぶは電気に打たれたように身体を震わせた。股間に通った縄が引き絞られた一瞬、クリトリスを挟むウサギの耳が奥に入り、包皮をめくってしまったのだ。

「い、痛い。せ、せんせ、痛い、あああああつ、死にそうっ!!」

剥き身の秘芽に、直接に当たったウサギの耳は、苦痛に近い快感をもたらした。プシュツと音をたてて、愛液とも尿ともつかないものが噴きだした。

包皮を剥かれた秘芽は、神経細胞のカタマリである。それが圧迫されるのみならず、メンソールがクリトリスに染みていく。

しのぶは両手でお腹を押さえながらブルブルと震え、次の瞬間には身体を硬くし、次には足を踏み替え、飛び跳ねるようにして悶えつづけた。

バイブを取ろうとして伸びた手が迷うように揺れ、再びお腹に戻る。バイブを引き

抜くことは簡単だったが、秘芽が根から抜けてしまいそうな錯覚にとらわれて、怖く抜けないでいるのだ。

「いい子だいい子だ。すぐに終わるから暴れるんじゃないよ」

史彦は、さらに乳房の前後に縄を巻きつけ、縄尻を尾骨の上の結び目に結びつけた。股縄が引つ張られ、パイプがさらに奥に入りこむ。子宮の入口が命のない道具に押しあげられて痛い。

「ほれ。終わりだ。奴隷らしくなったな」

「い、いや、せ、先生、痛いです」

「どこが痛い？ オマ×コか、おっぱいか？」

「お、おっぱいも痛いけど、アソコが、ヒリヒリします。熱くて、痒くて、アソコの奥がパイプにこすれて、クリが抜けそう……く、苦しいです……」

しのぶは涙を溜めた目で史彦を見あげた。史彦はにやにやと笑いながら、クローゼットのドアを開けた。

「きゃっ」

ドアの内側は一面の鏡になっていて、股間からパイプの先端を生やし、奇妙な水着のように縄をまとったしのぶを映す。

乳房は根元を縄でくびられたせいでいびつに前に突きだして、まるでロケットのようだった。ヘアの萌もえたつふくらした恥丘をケバだった縄が押さえ、股間からはみだすパイプの先端を押さえつけている。

「いやっ！」

しのぶは貧血を起こしそうになった。まるでボンレスハムかなにかのように縄がけされた自分の姿は、まさに奴隷としか言いようのないものだった。

史彦は、なにを考えているのか、しのぶに再びワンピースを着せかける。前ボタンをすべて填はめてしまうと、いつものしのぶが現われた。服の下がすごいことになっているなんて、一見したただけではわからない。

ほんの少し安心したのもつかの間、先生は、無抵抗になったしのぶの手を背後にねじると、親指と親指をテグスで結びつけてしまった。

さらに、史彦が首に填めたものを見て驚愕する。小型犬用の犬の首輪だった。赤い革でできていて、しゃれたチョーカーに見えなくもない。首輪の真んなかから細い鎖が伸び、先端は先生の手握られている。

「な、こ、これ、首輪？ い、犬の？ なんて？ ふ、服を？」

「散歩に行こうと思ってね」

